

視点2

主体的な遊びの中でこそ育まれる「探求」 を考える

北野幸子

(大学教員)

「探求」という言葉から感じたこと

「探求」という言葉についての執筆依頼を頂いたとき、まず思い浮かんだのは、デューイ（一八五九・一九五二）の『論理学―探究の理論』（一九三八年）でした。私は、拙いながら卒業論文でデューイの幼児教育論について検討しました。神戸大学は百十五年近くの幼稚園教員養成の歴史があります。大学の書庫には南イリノイ大学発行のデューイの全集があり、卒業論執筆のために索引から Kindergarten という語のある論文を探し、むさぼるように読んで懐かしく思い出されます。

かつての主事（現在の園校長にあたる）であった及川平治（一八七五・一九三九）がデューイの友人だったこともあり、神戸大学附属幼稚園では、子どもの遊びと生活を通じた経験主義的な教育実践を指向してきました。日本の大正新教育運動の担い手でもあった及川平治は、子ども中心の教育を提唱し、常に子どもの事実を起点とし、子どもの興味関心に応じ子ども自身が主体的に「探求」を深めることができるような動的（アクティブ）な教育活動を提唱しました。神戸大学附属幼稚園では現在でも、子どもの事実の記録を基に毎年教育課程や保育計画を見直すという形での

北野幸子（きたのさちこ）

神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授。乳幼児教育学、保育学、保育領域の専門職化、保育者の専門性について探求しています。

カリキュラム・マネジメントを続けています。

デューイのいう「探求」とは

デューイは、人は実際に体験しながら学ぶと考えました。彼の“Learning by Doing”（為しながら学ぶ）という言葉は有名です。彼は、人の知的働きにおいて「探求（inquiry）」が大切であるとしました。人やモノとのかわり、つまり体験と、人の認識活動や知的探求とは、分離したものではないと考えました。

デューイは特にそれまでの、主観と客観、事実と価値、理論と実践といったことを二項対立的に捉えることに疑問を抱いていました。まさに体験しながら学び、探求しながら、不確かであったモノについて確信していく、よって、学びとは知的探求が実践と一体化しているものだと考えていました（Dewey, 1938）。よくプラグマティズムとは「探求の理論」ともいわれますが、彼は、「探求」が深まると、単なる体験にとどまらず、思考することによ

り、概念化や一般化をもたらすことができると考えたのです。デューイは動的（アクティブ）な学びの方法を常に模索していたと言えます。動的な学びとは、興味関心が起点となり、問いが生まれ、それを体験的に解決していく、問題解決型の学びです。そこでは、何のために、何を学ぶのかにとどまらず、どのようにして学ぶのか、が大切にされます。学びの過程において教育者は、子どもとの相互作用を重視した丁寧な援助を行います。

学生時代、今思えば拙く不毛な二項対立的発想ですが、私は、設定保育vs好きな遊びを中心とした保育（自由保育）、子どもの主体性の尊重（応答的）vs保育者の教育的意図（教育的）といった構図で保育の在り方がいかにあるべきかを悩んでいました。デューイの「探求」の概念やその教育実践の影響を大いに受けた及川平治は、『分団式動的教育法』（一九一二年）等において、理論と実践や、応答的でありかつ教育的であるという折衷的な考え

方を提示し、実践において科学的であることを目指し模索していました。「探求」をキーワードに、これらデューイや及川平治の幼児教育論と出会ったことは、私にとって、幼児教育における応答的でありかつ教育的である方法を学ぶきっかけになりました。

プロジェクト法（プロジェクト・メソッド）とは、「探求」を動的（アクティブ）に行う、体験的な問題解決型の教育実践の方法です。

体験を通じて、学びの理論化や一般化がもたらされます。昨今、日本や各国でプロジェクト型保育が広がっています。ここでは主体的な遊びと生活、環境を通じた教育が大切にされています。子どもは、没頭して遊び、「探求」しながら、世界と自分、他者と自分の関係性をつくっていきます。乳幼児教育においては特に大切にしたいことであると思います。

プロジェクト型保育と「探求」

『プロジェクト・メソッド』（一九一八年）を

著したキルパトリック（二八七一・一九六五）はデューイの弟子で、両者から影響を受けて幼児教育の分野でプロジェクト型保育を提唱したのが、イリノイ大学名誉教授のカッツです。プロジェクト型保育はイタリアのレッジョ・エミリア等、各国で発展していきました。

プロジェクト型保育とは、あるトピックスについて「探求」を深め、体験的に学ぶ保育であり、まさに子どもが没頭して遊びながら学び育つ姿と重なるものと考えます。

プロジェクト型保育の起点は、子どもの好奇心・探求心・憧れ等の気持ちと、それいざなわれ子どもが行っている活動（遊びや生活）の事実です。子どものアイデアを大切に子どもたちとしっかりと議論しながら活動が展開され、子どもたちの相互作用の下、保育の計画が協同的につくられていきます。

プロジェクト型保育においては、子どもが没頭して遊ぶ中で、体験的に調べたり試したりしながら「探求」を深め、学んでいきます。

その中で考えや学びを可視化、表現し、「探求」した個々の学びの内容を確認し、相互作用の下、子どもたちの間で共有していきます。プロジェクト型保育で子どもが何に興味関心を持ち、いかに遊び込み、「探求」を深めていったのかを保護者に可視化する手法として、レッジ・エミリアでは「ドキュメンテーション」が作成されています。遊びの中の子どもの育ちや学びの過程を可視化した記録である「ドキュメンテーション」は、保護者に伝えるのみならず、それによって子どもたちが省察したり、保育者間で保育を共有したりするといった機能も果たしています。

子どもの「探求」と保育者の専門性

保育現場で大切なことは、今まさに目の前にいる子どもたちが、人やモノとかかわることを楽しみ、今の発達に適した経験が得られて、生きる力を育んでいることです。

子どもたちの好奇心・探求心・憧れを起点

とし、相互作用を大切にしながら「探求」を深めていく教育には、ライブで展開する遊びの場面で、保育者が判断し、働き掛けるその援助が大きな役割を果たします。あらかじめ「めあて」を設定し、自覚的に同じ内容を同じ方法で同じ教材（教科書等）を活用して手順通りに学ぶ小学校以降の教育とは異なり、保育者の専門性は、まさに相互作用の下、子どもと共に「探求」を深める教育の援助であると言えます。

子どもの「気持ち」を洞察すること、遊びの中の育ちや学びを見取ること、そして、高い関心と過度ではない期待を持ち、子どもと子どもをつなぐこと、育ちの見通しを持って環境構成や教材を準備し、「探求」を深めていくこと。こういったことを可能とする保育者の専門性こそが、保育の質の鍵を握っていると考えます。

注 十九・二十世紀転換期に米国で発展した、思考は行為や事実と結び付くべきとする考え方。